病める兒の歌

くさみだに風邪ひきしかと母上ののたまふもゆめ厭ふべからず
躰温のやゝ高き日は子心にあざむく罪を母なとがめそ（母の「今日は如何に」と問ひ給ふた）
夜のくだちとく眠らねば朝寢して母悲しめんとく眠らねば
われゆゑにわが病むゆゑに日を選ぶ母の心を笑ふべからず（大學病院に赴かんとするに）
宰相の印綬を帶びし空想ひまことになさむ願なりしかな
見舞にともらひし鷄のおづ〳〵と餌をあさる見ゆ冬ざれの庭
母校にて發火演習すると云ふ冬晴の日に思ふそのかみ
從軍記者黃の腕章の思ひ出もよろしや病みて家にこもれば

黎明

英法二年一　雅男

男五人涙に月を眺むてふ今宵弱者の悲しみを言ふ
喜びは消ねて迹無き思ひ出の夢におびゆる我が心かな
うつらうつらまどろむ夢に長唄のとけて今宵の雪積るなり
あはかたの消ねても絶ねず流れ行く水に悲しき物語あり
かたかたにへりし足駄の齒を見やり一人淋しくほゝゑみて見ぬ

起き出でて空を眺むる足裏に今朝は冷たき宿の借下駄

劍とりて

三、二　生

黎明の柱に倚れば何となく不安の增しぬ試驗近づく
集ひては戰の日を語りあふ合宿の冬夜深うして
年老いし母の言葉を正しとは思へど背く吾なりし哉
たらちねは如何思すらむ劍を捨てよと文見る度に狂ほしき兒を
母に背き便りせぬ日の重なればおどおどと湧く不安の思ひ

漂泊の心

三、三　富永雄載

かにかくにふるさとの灯の見わければ心うれしくて口ずさみをり
妹も母も病めればたゞひとりもだして飯はむ淋しき心
ほゝ笑みて火鉢をかこみ座してありとはに離れし二つの心
心にもあらで母をばのゝじりしあとの淋しさきはまりもなし
しんしんと雪ふりつもるこの夜ふけせき入り給ふ母はかなしき